

## スエーデンの思い出

平井信義

### (一)

七月十六日、思い出深いケルンを後に、一路北上して二つの海峡を越えると、スエーデンのストックホルムに着いた。この国では七月が最も明るい季節である。港湾には真白な船が水面に影を落とし、そのあたりをモーターボートが軽快な音を立てて行ききしていた。

港湾に取り巻かれたスカンセンの丘の麓には、大きな樹々がその枝に葉を茂らせて、私の散歩道の陽をさえぎるほどであった。

道路は掃き清められたように美しい。パリでもドイツの街でも、切符の使い残しを路上に捨てる人が目立ったが、ここでは、ポケットの屑埃を捨てるのも気がひけるような気がするほど、きれいであった。

路上の美しさを保つには、二つの方法がある。一つは掃除人夫を増して、絶えず清掃につとめること、もう一つは各個人個人が注意して、町をよごさぬようにすることである。パリが昔と較べてよごれていることの説明として、市の予算が少くなつて掃除人夫が少くなつたということを書いたが、この国では、個人個人が町の美しさを保つことに注意をしているように思えた。

初めての日、私は町角に立って地図をひろげながら、小児科病院の方向を探していた。すると、中年の紳士は私のところに寄つて来て、英語で「どこへいらっしゃるのですか」とたずねかけてきた。そして、チョッキの内ポケットから眼鏡を取り出して、私の地図をのぞき込んだ。しかし、地図を見慣れぬ人なのか、私の目的を探しあぐんでいると、二人のそばを通つた青年が、これも英語で「どこを探しているのですか」とのぞき込んできた。紳士が病院の名前を

いうと、彼は「私が案内してあげましょう、知っていますから」と無雑作にいつて、紳士と二言三言スエーデン語で話し合ってから促すように私の肩に手をかけた。「あなたも、そちらの方へいらっしゃるのですか」と私はきいた。「いいえ、方向がちがうのですがそこへいくまでにまだ時間がありますから」との好意にすがって、その青年の肩と頭を並べて歩きながら、この町の名所などについて話をきいているうちに、目的の病院の前についてしまった。

「あそこがそうです。守衛がいますから、あとはいきってください。さようなら」——彼は頭をかき上げると、そのまま引き返していった。名前もきかなかった。その顔立ちも、今ははつきり思い出せない。しかしその好意だけはいつも心によみがえってくるのである。

個人個人がその心かげによって町を美しくする、個人個人が進んで見知らぬもののために親切をつくす。こうしたことのできる人間にするには、一体、子どものときにどういう教育をしたらよいのだろう。私は病院の門から、奥まった病棟までの道を、そのことを考えながら歩いていった。

確かに、皆のために尽す心、知らない人のためにも努力する心、——そうしたことを目標に、私も日本で壇上から、著作を通して唱えてきた。しかし、自分自身がこれまで、一体どのような努力をしてきただろうか。なるほど、理屈をつければあれもこれもと、自分のしたことを言いあげることではきよう。しかし、今日ほど自然に、人の好意を身にしみて感じ、自分を恥じる気持になったことはない。これは、単に異国の旅の郷愁からきているものではなかった。「考えることではないのだ」「行動することなのだ」——すでに多く



の思想家によっていい古ざれていることばが、非常に身近かに感ぜられた。

私の訪問した病院にも、「問題児の病棟」があった。「すでに夏休みなので、子どもたちを家に帰してしまいました」と、私の案内に立ってくれた医者が、済まなそうにいった。そして、カルテをもってきて、そこに収容されている子どもの問題について、あれこれと説明してくれた。

「こう説明しても、実は問題発生の原因については、よくわからないことの方が多いですね。そう思いませんか？」彼はすなおな目差しを私に向けていった。

「子どもの心、人間の心は、本当に不可解だと、私はしばしば思うのですよ。ところが、そうしたことが、何でもわかってしまうものだと思っている子どもの研究者がいるのですね。アメリカの文献を読んでみると、しばしばそれを感じるのですが……いや、私どものまわりにもいますよ」

私もそれに応じた。

「自分の心さえも、なかなかわかりにくいものでもものね」

「まさにそうです」

二人は笑い出してしまった。

「自分の心の中の異常な状態 (pathologischer Zustand) ——これがなかなか把握しにくいのですからね」

「いや、自分は異常でないのだ、と思いついていてる人が、心の研究者の中にもずい分いますよ」

「それは、精神病の患者が、自分は正常な人間だと思いついてるのと同じではありませんか」

二人は再び笑ってしまった。

## (二)

午後には、女医さんの自動車に乗せてもらって、「問題児」の收容施設を見学に行った。シュトゥックホルムから四、五里も離れた湖畔についたのは、すでに三時近かった。

斜めに傾いた陽ざしに、湖面はきらきらと輝き、湖畔に続く森の影を一層黒く映し出していた。葎の葉面が、かすかな風に動いている手前の岸に、棒杭に板を渡しただけの船着き場ができていて、六、七歳と思える男の子がしゃがんで、水面に細い竿を挿していた。そのすぐ後に、黒い日よけの眼鏡した女の子が、うす紅色の服の上に腕を組んで、その男の子のする動作を見ていた。

「ここに收容されている子どもです」と女医さんは、小声でいった。「いろいろな問題の子ともです。家庭で手を焼いて送ってくる子どももいますが、児童保護委員から送られてくる子どもも多勢いるのです。盗みをした子、徘徊した子など、社会的な問題を起した子が多いいです。」

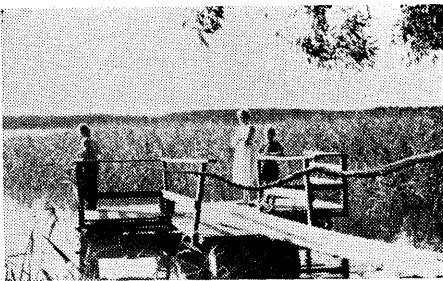
白いペンキの塗られたきれいな建物物の玄関に立ってベルを押すと、中から五十前後と思われる小太りの女の人が出て来て、女医さんと握手をした。

「この方が、この所長さんです。こちらは日本から来られた……」私も握手をした。

「先に、私どもの用件を付けますから………」と女医さんは言つて、「御一緒にいてくださって一向構いません」と、湖の方に面した応接間に入った。

女中がもつて来たサンドウィッチと紅茶を味いながら、二人の女性が何かスエーデン語で話をするのを聞くとはなしに、戸外に眺めていると、突然老婦人が涙を流して、それをすすり上げながら、はンケチで目頭をふいた。

「実は……」と女医さんは私の方にドイツ語で話しかけて来た。「いま、この子どもたちのことを話していたのです。六つになる子が、二週間前に收容されてきたのですが、家が恋しくなつて、シュトゥックホルムまで四里の道を、歩いて帰つたのだそうです。その子の心情を思うと、かわいそうだといつて、所長さんは涙を流しておられるのです。この所長さんは、本当に心の暖い人で、子どもとよくなつき、しばらくいる子どもは、この方がよくなることさえあるのです。」



すが…… ことに、家庭にいろいろと問題のある子どもばかりですから」といった。

その語について、老婦人は私の方を向いて、スエーデン語で何か話しかけてきた。女医さんはそれを受け取って、

「湖畔という環境は、子どもの気持を落ち付かせるのは本当によいのですが、湖にはまって溺れたりしたら大変だと、非常に気を使うものだ、とおっしゃっているのです」

「ずいぶん幼い子どももいるようですが、本当に大変なお仕事ですね」と私も相づちを打った。

「この寮の他に、まだ三つあります。皆、湖に面しているのですが、あとで御案内しましょう」

老婦人のあとについて、私もはその寮の部屋部屋を見せてもらった。それぞれの部屋でゲームをしたり、本を読んだりしていた。親しそうに挨拶する子どももあったが、全くそしらぬ顔をしている子どももいた。大きな部屋では、太った中年の心理学専攻の人が、子どもたちとお三時を食べていた。

「こっちに二人いるのは、強い拒否症の子どもです」と、皆の集っている食卓の隣の机に、かじりつくようにしている小学生の男の子を指して女医さんがいった。

「まだはいって来て、日が立たない子どもですが、心理学の先生が、非常によく可愛がって下さっていますから、じきに拒否症もよくなるでしょう。あの方は、もうこれで十二、三——そう十三年半も、ここの子どもたちのために努力してくださっているのです。」

「心理療法もなさいますか？」

「時々やっていますが、それよりも肝心なのは、矢張りその人の人格ではないでしょうか。心理療法を否定するものではありませんが、結局、療法そのものよりも、それをやる人の人格ではないかと、あの方とも話したのです。」



私どもは、戸外に出て、戸外でフットボールをしている男の子の一群を眺めた。けそんじたボールが私どもの方に転ってきたので、私がけ返すと、一人の子が私のところへよって来て、何かいった。「一緒に遊ばないかときいているのです」と女医さんは笑いながらいった。

「喜んで」と私は子どもたちの群にはいって、ボールをけり合った。十分ほど遊んでいると、女医さんが大声で何か言った。子どもたちは笑ったり拍手をしたりし

た。「まだ先がありますから、出かけましょう」女医さんはそういって、自動車をとめてある方へ歩いていった。

「さようなら、ありがとう（タクタク）」私は、それしか知らないデンマーク語で別れをつけて。自動車に乗った。

子どもたちに取り囲まれながら、自動車は再び湖畔にそってエンジンの音を立て始めた。（筆者はお茶の水女子大学助教教授）